

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	鳥籠
Author(s)	犬養, 孝
Citation	龍南, 198: 46-52
Issue date	1926-07-10
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/8856
Right	

鳥籠

犬 養 孝

「この中だつたんだよ。まだ血が着いてゐるぢあないか。」

九月もまだ浅い、晝下りであつた。秋晴れとは云ひ切れないが、アルミニウムでも張りつめたやうに空はざら／＼光つてゐた。薄日は裏の桐の木の葉づれから折れ込んで、無造作に落ち崩れたまゝの、山のやうに積み上つてゐる瓦の……の上に落ちてゐた。

俊一はかう云つてから、座敷のまん中に高く積まれてある疊の上の鳥籠を取つて、丁度窓際の敷居に腰を掛けてゐた平田の顔を覗き込んだ。

「この中であいつはぢたばたもがいたんだね。」

「ふん。馬鹿に可愛想なことをしたもんだなあ。」

鳥籠は俊一から平田の膝に移されてゐた。彼の眼は異様に鋭くなつて一瞬間顔色は青褪めたが、

「ほん當かい。えー。」

と附け足して俊一を見返した。

家の中は妙に暗かつた。疊と云ふ疊は皆積みあげられて夫々の部屋のまん中に油紙や筵類を被せて置かれてあつた。障子や襖も破れたまゝ部屋の片隅に積まれてあつた。茶の間の床には大きな丸火鉢が置いてあつた。伯父が子供の時からあ

つたと云ふぼんく、時計が依然として、けれど左にやゝ傾いたまゝ茶の間の中央の柱に懸つてゐた。俊一にはこの毀れ切つたあばらやの住ひ手はあの大きな時計であり、丸火鉢であり疊であるかのやうに考へられて、部屋の中を一しきりの風に送られてからく、と云ふ音を残してゆく桐の枯葉も「俊一―お前にはもう用は無いのだ。これは俺達の住みだ。」と、自分を嘲つて駆けてゆくやうに見えた。ぼんく、時計はいつも十二を打たうとする二分前の姿を續けてゐる。

地震後一週間立つてから俊一の家では俊一と父とを残して家中小石川の家に移つて了つた。無論家がめちやくちやに傾いて、その上屋根の瓦もすつかり搖り落されて了つたので、早速便利瓦を張つたとは云へ、雨洩りが絶えなかつたので避難したやうな譯なのである。火は三日の朝に消えてこの方面の心配は薄かつたが○人騒ぎやら、人の往来やらで外は絶えずあわたゞしさを繰り返してゐた。日に幾度となくやつてくる餘震も餘り大きくはなかつたが、まだ前途に不吉な惡寒が無いでもなかつた。その上父さへ「今晩は歸へらないかも知れない。よく氣を附けて。殊に火は注意して何なさい。」と云ひ棄てゝ行つたが、役所が役所柄、俊一はこれに對して抗議を申込む譯にもゆかなかつた。彼は薄暗いあばらやに例の時計を向ひ合つてゐる不安さに堪へなかつた。左に傾いてゐるその姿が自分の不安や狼狽をさげすんでゐるやうに思はれた。落ちなかつたのが憎らしいと思ひ返したが却て氣にしだすと不安は増してくるのであつた。この時彼を訪ねて、とまることを約してくれたのが平田である。

「ぼん當かい。えゝゝ」

俊一は「何と云ふ恐ろしい言葉だ」と身に突きさゝるやうな衝動が一瞬間身体中を駆け廻る思ひがした。「えゝゝ」それは更

に附け加へて彼を苦しめた。平田の眼はちつと返答を待つてゐた。横合から急に吹き込できた風に、よごれた黄色い羽が鳥籠の中で躍つてゐた。

日暮近かつた。大學はもう燃え落ちてゐた。人々の悲鳴は巷から湧き上つて次から次へと波打つてゐた。次第に空は赤味を帯びて來た。南の方に當つて一面黒かつた空は目立つて赤くなつて來た。橙色の太陽を掠めて煙は急いで飛んで行つた。街路は赤つちやけた光を反映してゐた。大洋の時化に浮べられた街のやうに家屋は揺れ電柱は右へ左へ素早い運動を續けた。人々は兩手を舉げたまゝ聞き取れない叫びをあげて空を仰いで往來を駈け廻はるのであつた。數度の餘震が過ぎてから前の家と家との間からは血に濡れたやうな舌が空をついて上つてゐた。青桐のつく／＼法師が時ならず鳴いた。

「お兄さん。早く來て頂戴よ。金魚鉢のわきにカナリヤが二羽來てるのよ。さつきからちつとも逃げないの。可愛想だから鳥籠に入れてやらない？」

「如何するんだい、入れて。空を御覽よ。鳥籠に入れたつて、こゝいらが焼ければ結局死ぬんじゃないか。それよりか。」

「だつて、お兄さん。早く來て入れてやつて頂戴よ。」

妹は泣いて歎願した。火の子がとんで來た。

「どれ。」

俊一の前の小鳥は正しくカナリヤであつた。羽を蹴してふくらましたまゝ二羽共いくら近づいても身動きもしなかつた。

小さい眼は恐怖に怯えてゐた。俊一は、

「籠に入れたつて、……。」

とは云つたものゝ逃げ去らうともしないで震るへてゐる二羽の姿は助けを訴へてゐるものゝやうにも思はれて、

「何處かの家できつと逃がしてやつたんだよ。かうなると逃がしてやつた方がいゝか、そのまゝにしてゐた方がいゝか善し悪しだね。だが、これぢあ可愛想だから入れてやらうよ。」

妹は安心したやうに俊一が入れるのを見てゐた。小鳥は靜かに鳥籠には入つてくれた。幸ひに稗があつたのでそれを茶碗一杯に入れて水と一緒に籠の隅に置いて、床の間の奥にのせてをいた。

「この家が焼けなければ大丈夫ね。」

「あゝ。」

と云ひ切らうとしたが、そのことが却て小鳥の運命を傷つけるやうになる氣がして口籠つた。

「不忍池があるから、こゝは大抵助るだらう。」

人々は口々に不安の中にも無理に安心を求めようとして云つた。火の手はこの邊りを、のみ下さんばかりにその恐ろしい舌を山に映し、街路に、家屋に、照し返してゐた。何かなし、小鳥への氣懸りが俊一の逃げ路を絶えず追つてゐた。

「俊ちゃん。どうしたつて云ふの。まあこゝへ來て御覽なさい。」

姉の言葉に俊一は忘れてゐた豫感を急に拾ひ上げねばならなかつた。

それは地震後四日目である。あても無く逃げ廻り火に追はれて疲れ切つた身體を無事であつた彼の家に横たへた日の朝

である。庇の下の瓦の上には無数の火の子が落ちてゐた。そして風が吹く度に崩れた瓦の上を駆け下りて行つた。いつに無い涼しい朝である。

鳥籠の中には二つの冷い死骸があつた。籠の外には薄黄色い羽毛が散らばつてゐた。中には血の着いてゐるのもあつた。聲の上に落ちた血の二三滴はもうかたまつて了つてゐた。二つは脛せ細つた體に騒ぎ亂した羽手をつけて、夫々二本の足を前に突つ張つてゐた。

「平田君。だからきつと。二羽とも狂亂したんだね。きつと。水は零れてゐたが稗を食つた形跡もないんだもの。狂亂して血でも吐いたに違ひない。」

「さうかも知れないよ。あの物凄さぢあ……。何しろ小鳥だものね。」

俊一はほつと吐息をついた。平田も同時に吐息をついて鳥籠を床の上に置いた。

「放しておいたら生きてゐたかも知らないなあ。」

「うん。本當に可愛想なことをしたよ。生きものである以上その命は何だつて大事だがね。それがかう云ふ小さいものの魂になると一層そんな氣がするよ。殊に小鳥つていふ奴は無心で可愛いからね。」

俊一は兩手で頭を抑へて、庭を見てゐる平田に向語り續けた。

「僕が手を出した時にはあいつが震へながらも手の平にのつて來るものね。不斷なら逃げるのだらうに。やつぱり救を求めてゐたやうにも思へるんだ。」

俊一は妹も憎めず、かう考へることによつて責を逃れたやうに思つた。

「まあ小鳥だからいゝさ。そんなに氣にしてどうするんだい。憎んでやつた譯ぢあなし、愛する心からやつたんだあな

いか。仕方が無いさ。」

平田に云はれても俊一は床の上の鳥籠から眼を放すことが出来なかつた。急に彼は頭をあげて笑ひながら平田の方に向き直つた。

「今急に思ひ出したがね。昨日妙な夢を見たんだよ。」

「妙な夢つて。そいつはまたどんなんだ。」

「それがおかしいんだよ。街なんだ。かう、商店の多いね。電燈がついてゐる所を見ると夜なんだね。そしてまあ僕がその往來を獨りで歩いてゐたと想像し給へ。それがもう夜更らしいんだね。僕はどん／＼歩いて行つたよ。すると人だかりだ。そばへ行つて見ると驚くぢあないか。その家は指物師か疊屋か分らないんだが何しろ職人の家だよ。そこで二羽のカナリヤが何か仕事をしてゐたらしいんだね。けれど二羽共仰向けに死んでゐるんだ。割腹して自殺したのだと云ふ人もあるし、やられたんだと云ふ人もあるんだね。僕は一寸垣間見ただけで一生懸命になつてそこを逃げて來ちあつたんだ眼を覺ましてほつとしたよ。」

「さうかい。随分君も小鳥のために苦しんだね。眠つてまでも。」

「本當に悪かつた氣がしてならないんだ。」

薄雲は段々遠のいてまつ蒼な空がち／＼見えて來た。瓦の下に押しひしがれた朝顔が萎れた花をによきつと出して眞夏に劣らない光に打たれてゐた。すぬ／＼と幾群かの赤とんばが十藏のわきに消えると、一しきりの風に桐の葉の二三枚が舞ひ落ちて毀れたとひが庇で徹かに嘯いた。

「もう何時にならうか知ら。」

「さあ？」

俊一は聞かれてつとと身体をのばすと時計は尙十一時五十八分を示してゐた。籠の中から嘴でくつくつくつくとその底板をつつく音が聞えてくるやうな氣がした。毀れ茶椀と羽切れが残つてゐただけだが。（二九二六・四・二六）